

# 巨人物語

東京女子高等師範學校教諭兼教授

石井庄司

三二

巨人物語云へば誰でも直ぐにガリヴァー旅行記の大人國の話と思ひ出すであらう。ガリヴァーは東印度への航行中難船して、プロブディングナグといふ大人國へ行く。そこには身の丈六十呎に及ぶ人間が住んでゐる。ガリヴァーは此處で色々恐ろしい目に遭つたり、また面白い事に出逢つたりする。一體プロブディングナグといふ大人國は何處にあるのか尋ねべくもない。しかしガリヴァーは三度目の航海で、空中に浮遊する飛島ラビユタに行き、それから魔法使の島や、不死の人間のゐる國を訪ね、のち日本に立寄つて歸國することになつてゐる。大人國のプロブディングナグも案外東洋の日本あたりの話がある暗示を與へてゐるのではなからうかと思ふ。かういふ結論は、容易に出来ることではなく、多くの學問的な研究に俟たなくてはならぬのであるが、こゝに我が古典の中にある巨人傳説について世の注意を喚起してみたい。西洋の話ださばかり思ひ込

んでゐたものが、思ひもかけぬ自國の古典の中に見出されるのは、興味あることではなからうか。

それは常陸風土記の那賀郡の條にある左の記事である。  
平津の驛家の西一二里に岡あり。名を大櫛おほきといふ。上古いにしへに人あり、體極めて長大おほほに身は丘壟かみりの上に居りて、蟹を採りて食ひき。その食へる貝、積聚りて岡つもと成りき。時の人大きに朽ちし義ことを取りて、今大櫛の岡おほきいふ。その大人の踐おほびみし跡は、長さ三十餘歩、廣さ二十餘歩あり、尿ゆまりの空址あざは、二十餘歩ばかりあり。

「平津の驛家」せいしんといふのは、註釋によるに、平戸、大串の二村のあたりで、今茨城郡に屬してゐる由である。大串村の西隣の東前村に池があつて、これが尿の跡であるなごさまことしやかに記されてゐる。風土記の此の記事は、上代に於ける貝塚かみりといふものの觀念を明示するものとして、その方面の人々には既に注意されてゐる。しかしこれを巨人傳説おほびといふ方からも見て與あるものである。巨人が丘の上

に住みながら海岸の蟹(はまぐり)の古語(こご)を採つてたべたさいふのである。貝塚の成因をかる巨人の生活のあさましきたのである。巨人の足跡について「長さ三十餘歩、廣さ二十餘歩」といふ「歩」は尺度の單位としての「間」をいふので足跡は三十間に二十間あつたさいふのである。なほ尿の穴址を「二十餘歩」といふさまの「歩」は「坪」をさすもので二十餘坪の廣さといふことである。巨人の足跡については、美濃古蹟考といふ本にも、近江の琵琶湖を一跨に跨ぎ越えたさいふ巨人の足跡が、石津郡大清水兜村といふ處にある由である。

私が子供の時に、母から聞いた話に、大和の畝傍山(あきり)を成山(なり)を天秤棒(てんすべ)に擔いで持つてきた大男(おおお)があつた。暫く休んで、また擔(かた)がうさ思(おも)つて、ヤツ(やつ)を聲(こゑ)をかけて擔(かた)ぎ上げた處(ところ)が兩方(りやうほう)の荷(に)が重(おも)くて、ギーツ(ギーツ)棒(ぼう)が折(よ)れてしまつた。「ヤ」(や)といつて、「ギ」(ぎ)といつたので今の八木(やま)の町(まち)が出来たので、そのとき大男(おおお)の膝(ひざ)を突(つ)いた跡(あと)が畝傍山(あきり)や可成山(なり)のそばにある池(いけ)であるといふやうな事を聞いた。これは「八木(やま)といふ地名(なづな)の説明(せ明明)の單純(たんぜん)な傳説(でんせつ)であり、また一口(ひとくち)噺(ばなし)に過ぎないものであるが、畝傍山(あきり)や可成山(なり)のやうな形のよい美しい山を擔(かた)いできた巨人(きじん)があつたさいふことは、子供心(こどもごころ)にもなんなく面白(おもしろ)く感じたことであつた。

かういふ巨人傳説(きじんでんせつ)は、日本の各地(あちこち)に傳(うつ)つてゐるのではな

からうか。風土記(ふうどき)の中では、播磨風土記(はりまふうどき)の託賀郡(たくかぐん)の條(じょう)にも見(み)えてゐる。

託賀(たくか)名(な)をつくる所(ところ)は、昔(むかし)大人(おほびと)ありて常(つね)にかがまり行(い)けり。南(みなみ)の海(うみ)より此(こゝ)の海(うみ)に到(いた)り、東(あづま)より巡(めぐ)り行(い)きし時(とき)、この土(つち)に到(きた)りて云(い)ひしく、他(た)し土(つち)は卑(ひ)ければ、常(つね)にかがまり伏(ふ)して行(い)きしに、この土(つち)は高(たか)ければ伸(の)びて行(い)けり。高(たか)きかき云(い)ひき。故(ゆゑ)、託賀(たくか)の郡(ぐん)さいふ。その躰(たぐ)みし跡(あと)處(ところ)、數(かず)々(かず)沼(ぬま)さなれり。

これまた「託賀郡(たくかぐん)といふ地名(なづな)の説明(せ明明)であるが、巨人(きじん)の足跡(あしあと)が數(かず)多く沼(ぬま)になつた説明(せ明明)してゐる處(ところ)が多い。本文(ぶん)に「南(みなみ)の海(うみ)より北(きた)の海(うみ)に到(いた)り、東(あづま)より巡(めぐ)り行(い)きし時(とき)々々(しばしば)あるので、井上通泰博士(いの上)通泰(とんたい)博士(はくし)は、「此(こゝ)大人(おほびと)は、天日槍命(あまひのほのみこと)の面影(おもかげ)を傳(うつ)へたるならむか」と言(い)つて居(ゐ)られる。(播磨風土記(はりまふうどき)新考(しんこう)四(よ)一(いち)三(さん)頁(ぺい)天日槍命(あまひのほのみこと)のこゝは、播磨風土記(はりまふうどき)には度々(たびたび)出て來(き)る。命(いのち)は韓國(こくわん)から渡來(わたく)せられた神様(かみさま)である。天日槍命(あまひのほのみこと)は垂仁紀(すせのき)の一書(いつしょ)の記述(きじつ)によるに、崇神天皇(たかみむす)垂仁天皇(すせのき)時代(じだい)の人(ひと)といふことになる。さうして來(き)るに、常陸風土記(つらみ風土記)にみえる大人(おほびと)に播磨風土記(はりまふうどき)に見(み)える大人(おほびと)は聊(いさ)か性質(せいしやう)の違(ちが)つたものやうである。即(すなは)ち前者(ぜんぜい)は原始民族(げんじみんぞく)或(ある)は先住民族(せんずみんぞく)であり、後者(こうぜ)は新來(しんらい)の英雄(いゆう)をさすものである。共に巨人足跡傳説(きじんあしあとでんせつ)の文獻(ぶんけん)をみるこゝが出來(き)やう。

さて我々は、このやうな巨人傳説を子供の世界に如何に生かすべきであらうか。

夕御飯が濟むと、子供が傍の柱により添つて直立不動の姿勢をとり、頭を真直にし、顎をぐつと引いて、苦しうに「お父さま、背を測つて下さい」といふ。するに次の子供も負けずに出てきて、「お父さま、背測つてちやうだい」といふ。「こんなに高くなつたよ」といつて、頭をさすつてやるに、面々大よろこびである。ところが今度は「お父さまの背を測つてあげませう」といふところになり、兄弟二人がかりで椅子を持ち出し机を持ち出して、自分より遙かに高い父の背丈を測るのに大活躍をする。思ひきつて背のびをするに子供らにはいよく手がまきかない。こんな時に大男の話を出してみる。

「お父さまより、もつともつと大きい大男、百倍も二百倍もある大男がゐたんだよ、ここからお茶の水の幼稚園ぐらゐるまでは、ひよいと一またきさ」といふと、ウエーと驚いて、何も無いのに天井を仰いでゐる。自分が歩いて行くに二十分も三十分も要するところを一とびと聞いて驚いたのであらう。そんなに背が高いだらう。天まで届くだらうと考へてゐる。するに長男が獨言のやうに口を切つた。「そんな大きな大男のはいてる靴、みんなんだらうな」と。そりや

大きいよ、講談社のお家より大きいよ」と出鱈目を言つたところが、子供にはよくわかつたらしい。堂々たる七階建のビルディングより大きい靴を履いてゐる大男、かういふ大きな靴を履いた大男が、ドシン、ドシンと歩いて行く大變だらうなと思ふ。こんきは次男がきいた。「大男の帽子、そんなに大きいよ」「さあ」と言つたきり、流石の父親も少々困つたが、いつも此の子が鳩ボツボの豆をやりに行く、護國寺の本堂の屋根と言つたら分るだらうと思つて「大男の帽子はね、護國寺の青い屋根より、もつと大きいよ。それから大男の帽子は、鐵兜だよ」と言ふと、早速長男は乗出して「大男は、出征するんですか」ときく。「さうだ、さうだ、大男が出征して、バイヤス灣に上陸したんだよ。」「ウーミ手を拍つてよろこんでゐる。かうなるよ占めたものである。話はいくらでも出て来る。

「大男が大きな靴を履いて、ドンドン廣東へ進んで行つたのさ。するに支那兵の造つておいた鐵條網やトーチカをみんな靴でふみにじつてしまふ。そのあとから日本の兵隊さんがグン／＼と従軍して来る。大男が背のびをして、ずつと見渡してゐるに、向ふの川の岸に澤山の敵兵が集つてゐる。そこで大男は、川を一跳びに越して、敵兵の後に廻りちよ／＼と靴の先で掃ひのけるに、敵兵はみんな川の中へ蹴飛ばされてアップアップと流れて行く。もう敵はる

ないかなと思つて、よく見るを、向ふの山の蔭に一箇師團ばかりの敵兵がかくれてゐる。よしと思つて、長い手をにゆつこ出して、さつこ掻き集めてこちらの川の中へ捨て、しまつた。……こんどは日本の戦車隊は、橋が落ちてゐて困つてゐるから、ちよつこ待つて下さい、いまみんな渡してあげますからさいつて、戦車を二臺も三臺もちよひさ掌の中に入れて川を渡す。こちらでは重い大砲を運ぶのに困つてゐるので、エ、面倒臭いさいふので、兩掌の上に乗せて一度に五門ばかり一時に運んでしまふ。……」

かういふことを言つては餘りに荒唐無稽であるとお叱を受けるかも知れないが、兎に角愉快な話である。スキャントのガリヴァー旅行記には當世に對する諷刺があつた由であるが、我々の古典にある巨人傳説はまことに無邪氣で、本當の子供の生活が出てゐるやうに思ふ。もつこよい話がいくらも出来ると思はれるが、今回は、以上のやうな紹介だけで御免を被むることにする。(三月二十四日)

○  
季節々々につけて思ふことですが、春は特別に野山の自然が思出されますね、あの豊富な自然、自由に眺め楽しむことの出来る自然、採るに任せ摘み放題といつた自然、羨ましいのは、そういふ處で日々遊びくらす子ども達です。といつて、そういふ思ひのまゝに、子どもを連れ出すことも出来ません。そこで、出来ることはといへば、自然を幼稚園へ運び入れることです。自然々々といふと大そうですが、草の花でよし、木の芽でよし、根があれば尚よし、土が附いてゐれば此上なし、一々立派なものではなくていゝのは勿論です。大人に見せるためになし、風流ですることなし、寧ろ、名もないやうな、なんでもないやうな、普通ありふれた自然こそ、子どものものでしての自然にふさわしいのです。野山へ連れて行つたつて、そういふ自然にこそ親しみをもつ子ども達です。

尙ほ念の爲に申添へるが、之れは「觀察」のためではない。そんな目的を立てゝのことでなく、たと、可愛い子ども達に自然を興へたいだけの心からです。春は春の幼稚園園らしく。(草象)